

## エゼキエル38章7-9節 「安らかに住む民」

### 1A 主の証人

1B 世界に対して

2B キリスト者に対して

### 2A イスラエルの回復

1B 羊飼(ダビデ)

2B 土地

3B 国

4B 安全保障

### 3A 安住の地

1B 敵からの守り

2B 安息までの戦い

3B 周辺からの攻撃

### 4A マゴグの地のゴグ

1B ロシア南部

2B トルコ

3B イラン

### 5A 主の救い

1B 肉の回復と霊の回復

2B 贖いまでのうめき

3B 最後に入る安息

## 本文

エゼキエル書 38 章を開いてください。2023 年もわずか、残り一日となりました。この大晦日における礼拝で、私たちが注目したい聖書箇所は、エゼキエル 38 章 7-9 節になります。「<sup>7</sup> 備えをせよ。おまえも、おまえのもとに召集された全集団も構えよ。おまえは彼らを統率せよ。<sup>8</sup> 多くの日が過ぎて、おまえは徴集され、多くの年月の後、おまえは、一つの国に侵入する。そこは剣から立ち直り、多くの国々の民の中から、久しく廃墟であったイスラエルの山々に集められた者たちの国である。その民は国々の民の中から導き出され、みな安らかに住んでいる。<sup>9</sup> おまえは嵐のように攻め上り、おまえと、おまえの全部隊、それに、おまえにつく多くの国々の民は、地をおおう雲のようになる。」

イスラエルの地に帰還して、安らかに住んでいる人々のところに、ゴグが率いる国々の軍隊が一気に攻めてくる預言の一部を、今、読みました。カルバリーチャペルの教会の多くが、年末年始に、

聖書にある預言に取り組み、そこから主が間もなく来られる時を知る時間を持ちます。なぜなら、主ご自身も、また使徒たちも、時節を知ることが命じておられたからです。

主は、エルサレムに近づかれて、神殿をご覧になりました。そして泣いて、言われました。「ルカ 19:42-44 もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。」神の訪れの時を知らませんでした。

そして使徒パウロは、救いの日が近づいていることを教えました。「ロマ 13:11-12 さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いをもっと私たちに近づいているのですから。夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。」主の救いの時が近づいています。だから、目を覚ましていきましょうと勧めています。

そして使徒ペテロは、第二の手紙で、預言こそが確かなもので、それを主が来られるまで、ともしびとして目に留めるとよいと勧めているのです。「1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」このように、預言に目を留めることは、主から命じられていることであります。

## 1A 主の証人

その中で、主が心に留めておられるのは、ご自分の選ばれたイスラエルの民です。

## 1B 世界に対して

預言者イザヤは、数多く、バビロンに捕え移された民が、約束の地に帰還することを預言しました。それを行うのは、ペルシアの王キュロスであることも断言しました。彼が生まれる百年も前に、それを語られたのです。そうすることによって、主なる神は、国々が仕えている神々に挑戦します。だれが、初めから終わりの時を告げることができるのか？と挑まれているのです。そして、わたしだけが神なのだと言われます。聖書の預言は、このように、永遠の神、初めから計画されて、それをことごとく実行される方であることを証しているのです。

その中で、イスラエルによって、ご自身が生きておられることを証されます。「43:9-11 すべての国々をともに集わせ、諸国の民を集めよ。彼らのうちのだれが、われわれにこのことを告げ、初

めのことを聞かせることができるだろうか。彼らが自分たちの証人を出して証言し、人々がそれを聞いて、『本当だ』と言うようにせよ。あなたがたはわたしの証人、——【主】のことば——わたしが選んだわたしのしもべである。これは、あなたがたが知って、わたしを信じ、わたしがその者であることを悟るためだ。わたしより前に造られた神はなく、わたしより後にも、それはいない。わたし、このわたしが【主】であり、ほかに救い主はいない。」

18 世紀に欧州にプロイセン王国がありました。今のドイツを中心にポーランド、オーストリアをまたぐ大きな王国です。その王、フリードリヒ大帝が、王宮に仕える牧師と議論しました。「聖書が神の靈感を受けた証拠を見せなさい。」と言いました。その牧師は言いました、「陛下、あなた様に対して、一つ言葉でお答えできます。」王は驚き、「そんな、強力な証拠を持っている魔法のような言葉が何なのか？」と尋ねると、牧師は答えました。「陛下、ユダヤ人でございます。」<sup>1</sup>神のおられることについて、私たちは天体や自然を見れば、それが明らかであることが知られています。神はいないと言っている者たちは、愚かであると詩篇に書いてあるほどです。神がご自身がおられることを、啓示しておられます。それと同じように、イスラエルの民は、神がおられること、そのことばが正しいことを、神が明らかにしておられるのです。

ですから、聖書に書き記されているユダヤ人のことだけでなく、聖書が完成した後のユダヤ人の歴史を見ても、今に至るまでの歴史を見ても、そしてたった今、起こっていることを見ても、神が生きておられることが、明確に証しされているのです。

## 2B キリスト者に対して

そして、キリスト者にとってのイスラエルは何か？私たちは、信仰によってアブラハムの子になっています(ガラテヤ 3:7)。アブラハムに与えられた祝福の約束は、イスラエルの民や国において実現していきますが、異邦人である私たちも、その祝福の霊的な部分をキリストに会って受けています。それを使徒パウロは、ロマ 11 章で、オリーブの木に例えました。私たちが野生のオリーブの木で、その枝ですが、栽培種であるオリーブの木である、イスラエルに接ぎ木されたものたちです。イスラエルにあることは、キリストにあつて私たちキリスト者にも連動するのです。

例えば、キリスト者は、神の恵みによって選ばれて救われています。それは、イスラエルが神の恵みによって選ばれたからです。今、キリスト者の多くが、ユダヤ人は自分たちの信仰には関係がない、イスラエルは関係がないとしますが、本当でしょうか？もし、イスラエルが見捨てられたということであれば、私たちが恵みによって救われたということも、危うくなるのです。イスラエルがたとえ、神に反抗していても、福音に敵対していても、そうなのです。「ロマ 11:1 それでは尋ねますが、神はご自分の民を退けられたのでしょうか。決してそんなことはありません。」聖書にある預言が、イスラエルにあつて成就していくのを見ていく時に、私たちキリスト者も、そこにある神の取り

<sup>1</sup> <https://online.flippingbook.com/view/386199/117/>

扱いを、自分の身にも起こることを知ることができます。

## 2A イスラエルの回復

預言者エゼキエルの見た幻に戻りますが、彼は、祭司の子でした。紀元前 597 年に、第二次バビロン捕囚の時に、バビロンに捕え移されました。そして、ケルビムの幻を見て、エルサレムの神殿をイスラエルの民が汚しているのを、神がエルサレムを滅ぼすことを預言しました。果たして、その通りになりました。その知らせを受けたら、そのすぐ後に、主はエゼキエルに、今度はエルサレムを回復させる預言を与えられたのです。主は、ご自分の怒りをその破壊において満たされたので、これからは、完全にご自分の憐れみで、彼らに恵みの霊を注ぐことをお決めになられたのです。

### 1B 羊飼い(ダビデ)

その言葉が 33 章から始まります。34 章には、神が羊飼いを回復されることを約束されます。国の指導者のことを、羊飼い、牧者と呼ばれています。これまで、イスラエルの王たちは、羊を養わず、散らしてしまつたと咎めます。それで、主ご自身が、自らが羊飼いとなって、彼らを集め、養つと約束されました。かつて、ダビデがイスラエルの羊たちをしっかりと養つたように、ダビデを主がお立てになり、彼らが約束の地で安らかに住むようになると約束しておられます。

主ご自身が羊飼いとなるというのは、何か聞き覚えがないですか？そうです、イエス様は、御自身が良い羊飼いだと言われました。良い羊飼いは、羊のためにいのちを捨てると言われました。そして、この方が再び来られて、ダビデの座に着かれて、イスラエルそして世界を統治されます。

### 2B 土地

そして徐々に、一つ一つ主は、イスラエルを回復されます。まず、土地です。主は、アブラハムにかつて、彼の子孫にカナン之地を与えると約束されました。彼らの反抗によって、そこから引き抜かれましたが、36 章は、そこに人々が戻ってくることを約束してくださっています。そして土地が回復するのです。「36:8-10 **だが、おまえたち、イスラエルの山々よ。おまえたちは枝を出し、わたしの民イスラエルのために実を結ぶ。彼らが帰って来るのが近いからだ。というのは、わたしがおまえたちのところに行き、おまえたちのところに向かうからだ。おまえたちは耕され、種を蒔かれる。わたしはおまえたちの上、イスラエルの全家に人を増やす。町々は住む所となり、廃墟は建て直される。」**

主は、このことを前世紀から見させてくださいました。ユダヤ人たちは、イスラエルの地から紀元 70 年に追い出されました。少しは残っていましたが、そこは異邦人の諸勢力によって支配されていました。近代に入る、紀元後 19 世紀には、そこは荒れ果てた土地となっていたことが記録されています。しかし、19 世紀の終わりから、東欧やロシアを中心に、ユダヤ人たちが帰還してきました。そこで、荒れ地を開墾して、畑を作り始めました。そして、全世界のユダヤ人たちに募金を促し

て、この地を購入して、そこに木々を植えるようにしていきました。そして、地中海沿岸の砂丘でしかなかったテルアビブに町を建て始めました。

そして今にまで至ります。イスラエルには、グリーン・ラインと呼ばれるものがあります。イスラエルと、パレスチナ自治区との境界線です。パレスチナの方に行きますと、一気に緑がなくなります。まばらに、オリーブの木がある程度です。その時に気づくのです。ああ、これまで見てきた木々は、植林だったのだと。

### 3B 国

このようにして、土地が回復しました。次に 37 章では、イスラエルの国が回復することが預言されています。あの有名な、涸れた骨々に対して、エゼキエルが預言をすると、それが生き返る幻があります。「37:7-10 私は命じられたように預言した。私が預言していると、なんと、ガラガラと音がして、骨と骨とが互いにつながった。私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。そのとき、主は言われた。「息に預言せよ。人の子よ、預言してその息に言え。『【神】である主はこう言われる。息よ、四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。』」私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中に入った。そして彼らは生き返り、自分の足で立った。非常に大きな集団であった。」

ユダヤ人たちは土地に戻ってきただけでなく、国も建てました。初めにユダヤ人国家の構想を提示したテオドール・ヘルツルは、1897 年 9 月 3 日の日記の中で、既にユダヤ人国家の大本を築いたと書きました。けれどもこうも記しています。「こんなことを今、声高に言おうものなら、世間の物笑いになるだけだ。だがおそらく 5 年たてば、いや 50 年たてば必ずだれもが分かってくれるはずだ。」1897 年の 50 年後、つまり 1947 年、その 11 月に国連がパレスチナをユダヤ人とアラブ人に分ける分割決議案を採択し、国際的にユダヤ人国家が認知されたのです。そして 1948 年 5 月 14 日に独立宣言をしました。

### 4B 安全保障

このようにして、国が建てられる幻がありますが、38 章と 39 章は、彼らの国が周囲の敵の攻撃から守られる幻になっています。これを表現するならば、安全保障の回復といってよいでしょう。先ほど読んだ箇所が、その一部になります。ゴグと呼ばれる人物が、いろいろな国々を引き込み、一気にイスラエルに攻め入ります。彼らは、安心して暮らしていたのですが、略奪を目的にして襲ってきます。けれども、主は地震を起こし、敵どもは同士討ちをするようになります。また、豪雨、雹、火、硫黄を降させます。それで彼らは一気に滅びます。

イスラエルは、その建国から一日も経たずして、一気に周囲のアラブ諸国によって攻め込まれま

した。1948年5月14日に独立宣言をして、それからすぐに主要五カ国のアラブ諸国から攻め込まれましたが、勝利しました。そして、何度か中東戦争がありました。ついに、ヨム・キプール戦争の後、エジプトがイスラエルと平和条約を結んだのです。そしてヨルダンも結び、そして最近の2020年には、アブラハム合意に基づく国交正常化を、UAE、バーレーン、モロッコを結ぶことができました。

マスコミの情報だけを見ていると、イスラエルが先住民を追い出す拡張主義のように、悪く描かれています。そうではありません。あくまでも、先祖たちのゆかりの地に、安心して住みたいというだけです。ですから、実はパレスチナとの、二民族二国家案をイスラエルのほうが、何度か提案しているのです。けれども、パレスチナのほうが拒絶して、拒絶した後にテロ行為を行っていき、今に至っているのです。

このようにして、36章、37章が実現して、38章に向かっているというのが、預言の成就の発展なのです。けれども、注意深く見ると、それぞれの幻において、まだ成就していない部分があります。土地が回復するだけでなく、御霊が注がれて彼らが清められる約束があります。国が建て上げられる時、涸れた骨は人の姿を取りましたが、息がありませんでした。しかし、エゼキエルが預言を行い、息が与えられて、生きた人となります。つまり、イスラエルの民族としては復興しても、まだ霊的には復興していないという段階があるのです。それがまさに、今のイスラエルです。イスラエルの人たちの多くが、イエス様どころか、神さえも信じていない人々です。ユダヤ教を実践していない人々です。

ある聖地旅行で、バスに、運転手の知り合いのイスラエルの人が入りました。彼に妻が語りました。今、教会ではイザヤ書を学んでいますと伝えたのです。話が何かかみ合わないのに、気づきました。それは、彼にとってイザヤ書は、ちょうど日本人に分かりやすく話すなら、源氏物語とか、過去の大事なユダヤ民族にとっての物語だったのです。ユダヤ民族にとって大切な書物であっても、神の預言の書とはとらえていないのです。

今の、直近ではハマスによる大虐殺ですが、イスラエルの直面するいろいろな困難は、神への飢え渴きを呼び起こすものであり、イスラエルがうめき、神により頼むようにするための過程であるとみることができます。主が、このような試練をお使いになっただけで、終わりの日には、患難の中で残された民が、主を求め、そして、霊的にも救われるのです。

### **3A 安住の地**

そこで本文に戻ってください。8節には、こう書いてあります。「そこは剣から立ち直り、多くの国々の民の中から、久しく廃墟であったイスラエルの山々に集められた者たちの国である。その民は国々の民の中から導き出され、みな安らかに住んでいる。」まさに、イスラエルの人々が通っ

たところでは、紀元 70 年から世界に離散する歴史をたどりました。そして 19 世紀の終わりに帰還を始めて、1948 年に建国しました。そして、人々は、一定の安全と平和をもって暮らしています。しかし、見てのとおり、ゆっくりとすることはできていません。

しかし、イスラエルではその安全と平和が最大に願っていることです。これだけの敵に囲まれながら、それでも大方、普通の生活を営んでいます。テロの被害を受けても、イスラエルの人々は日常生活を変えないのだそうです。自分たちが日常の活動をやめてしまうことこそが、テロリストの思惑です。ですから、いつものように生活することこそが、テロへの対抗措置です。彼らが、二千年近く、敵に囲まれて、戦って、それで得たいものというのが、平和と安住です。

### 1B 敵からの守り

実は、それが、聖書がイスラエルについて描いている、イスラエルに対する神の大きなご計画の目的といってもいいと思います。イスラエルの民は、エジプトでの奴隷生活から始まりました。敵に虐げられるところから始まりました。主がそこから救い出してください、敵のファラオの軍勢に対して戦ってくださいました。こうして、救いが始まります。

私たちキリスト者も、同じですね。罪の中の奴隷にいました。敵はサタンです。しかし、神はキリストを遣わしてください、その流された血潮によって、私たちを贖いだしてくださいました。敵の脳天を、その死とよみがえりによって打ち砕いてくださいました。

### 2B 安息までの戦い

そしてイスラエルの民の歴史に戻ると、エジプトから連れ出されて、荒野の旅を経た後で、約束の地に入りました。しかし、そこでも戦いが続きます。彼らが、約束の地で安息を得るために、戦わなければいけなかったのです。主が、カナン人を追い出さないと命じられていましたが、戦いが中途半端で、カナン人と共に住むことになりました。それが罫となって、彼らがカナン人の神々を拝むようになって、それで、その周囲の民からかえって虐げられるようになったのです。それで、戦いは続きます。主は士師を遣わして、戦うようにされたのです。

そして、そのまま主は王をお立てになります。ダビデであります。ダビデは、これら周囲の民と戦い、征服し、そしてようやく、安息を得ることができました。サムエル記第二 7 章 1 節に、こう書いてあります。「王が自分の家に住んでいたときのことである。【主】は、周囲のすべての敵から彼を守り、安息を与えておられた。」このように安息を得て、それで主の宮を建てたいという思いが与えられました。主は彼には、それを許しませんでした。戦いの人、血を流してきたからです。神殿は、平和を象徴する王でなければいけません。それで世継ぎの子ソロモンが神殿を建てました。そこに、繁栄と平和、シャロームが築きあげられたのです。

私たちキリスト者も、学びましたね、ヘブル人への手紙4章です。私たちに安息が残されていて、この地上で約束を忍耐をもって待ち望みながら生き、天にある安息に最後、入るのだということです。「4:11 ですから、だれも、あの不従順の悪い例に倣って落伍しないように、この安息に入るように努めようではありませんか。」

### 3B 周辺からの攻撃

そして、イスラエルの民ですが、約束の地で安心して住んでいる中で、ここエゼキエルが幻で見たように、周囲の国々、といっても、近接するエジプトやヨルダンなどの国々ではなく、遠く離れた国々から、一気に襲われます。そうした中で、主がそれらの敵を滅ぼされるのです。聖書解釈によっていろいろ変わりますが、このエゼキエル戦争をハルマゲドンと同じだという人もいますし、そうではないという人もいます。けれども、同じであっても、別の戦いであっても、周囲の国々から、一気に攻められるということには変わりません。

イスラエルの一つ一つの歩みが、神の救いのご計画を示していて、私たちキリスト者に関わるのですが、多くの国々から攻められることは、関係はあるのでしょうか？ イエス様が、世の終わりの時に、全ての人から憎まれると預言されましたね。「マタ 24:9 そのとき、人々はあなたがたを苦しみにあわせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」ユダヤ人は、あらゆる分野の人たちから憎まれます。なぜか？ というのは、以前、学んだように、彼らが神に愛された選びの民で、サタンがそれを憎んでいるからです。しかし、私たちキリスト者も、キリストにつながっているゆえに、キリストが世に憎まれているので、私たちも憎まれます。

世界で最も迫害を受けている宗教は、キリスト教です。北朝鮮やアフガニスタンを筆頭に、アフリカや中東において、苛烈な迫害があります。ナイジェリアでは、クリスマス時期に、教会に過激派が入り込んで大虐殺を働きました。しかし、最後は救われるのです。

### 4A マゴグの地のゴグ

そして、エゼキエルの見た、ゴグの戦いの幻が、今のイスラエルに敵対する勢力に、不気味に重なっているのです。2節から6節までを読みます。「<sup>2</sup> 人の子よ。メシエクとトバルの大首長である、マゴグの地のゴグに顔を向け、彼に預言せよ。<sup>3</sup> 『【神】である主はこう言われる。メシエクとトバルの大首長であるゴグよ。今、わたしはおまえを敵とする。<sup>4</sup> わたしはおまえを引き回し、おまえのあごに鉤をかけ、おまえと、おまえの全軍勢を出陣させる。それはみな完全に武装した馬や騎兵、大盾と盾を持ち、みな剣を取る大集団だ。<sup>5</sup> ペルシアとクシュとプテも彼らとともにいて、みな盾を持ち、かぶとを着けている。<sup>6</sup> ゴメルとそのすべての軍隊、北の果てのベテ・トガルマとそのすべての軍隊、それに多くの国々の民がおまえとともにいる。』」ここに出ている、一つ一つの国が、今の状況に、かなり重なっているのです。

### 1B ロシア南部

メシェクとトバルは、今のロシア南部だと言われています。カスピ海と黒海の間で、ジョージアと接している辺りです。そして、マゴグの地とありますが、これがスキタイ人の地であると言われて、エゼキエルが生きていた当時は、今のウクライナを中心に住んでいました。

これだけ考えても、分かりますね。ロシアは、一昨日、再び大規模なミサイル攻撃をウクライナ全土にしています。ウクライナを無きものにして、ウクライナ人もなきものにしようとしています。そして、ロシアは、今の、ハマスとイスラエルの戦争を上手に利用して、自分たちの有利に働かせようとしています。

### 2B トルコ

そして、ゴメルまたベテ・トガルマと 6 節に出てきますが、これはトルコです。エルドアン大統領は、トルコをイスラム化すべく動いていて、ハマスの味方です。イスラエルのネタニヤフ首相を、こともあろうに、ヒトラーになぞらえました。これは、最大の侮辱で、反ユダヤ発言です。

### 3B イラン

そして、ペルシアは、もちろんイランです。ロシアとイランは非常に仲がいいです。そしてイランは、イスラエルに死を！と何度となく叫ぶ、狂信的、反イスラエル国家です。ハマスにも多額の資金提供をしています。今回の攻撃も、イランの計画もあったのではないかとされています。

### 5A 主の救い

こうした中で、私たちが、今の時に、どのような心構えでいるべきでしょうか？

### 1B 肉の回復と霊の回復

ぜひ、霊の回復を願い求めてください。イスラエルが、今あるような窮地の中で、神に求めることができるように。イスラエルが苦しみの中にいるからこそ、クリスチャンたちを通して、福音に触れることもできています。異邦人に対する福音を語り続けるのはもちろんのこと、終わりの日に、異邦人の完成が来たら、イスラエルがみな救われると約束されています。「ロマ 11:26-27 こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。これこそ、彼らと結ぶわたしの契約、すなわち、わたしが彼らの罪を取り除く時である」と書いてあるとおりです。」

### 2B 贖いまでのうめき

そして、私たちは、うめきの時にいることを覚えるべきでしょう。これまで、頼りにしていたことが、一つ一つ取り除かれていきます。そして、今、世界でも、社会でも、自分の身の回りでも、なんでこんなことが起こっているのか分からなくなっているかもしれません。けれども、そのうめきこそが大

事です。それは、神の贖いを待ち望んでいるからです。「ロマ 8:22-24a 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだが贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。私たちは、この望みとともに救われたのです。」そして、御霊がうめきと共に、みこころにしたがって執り成してくださいませ。どうか、主の贖いを待ち望み、しっかりと主に留まっていましょ。

### 3B 最後に入る安息

そして、最後に、イスラエルにとって安住することが目標であるように、私たちも、自分たちの前に安息が備えられていることを覚えましょ。毎週の日曜日の礼拝は、主をお迎えする日です。そして、それは終わりの日に与えられる、主の安息を御霊によって、前もって味わっている姿です。パウロが、励ましました。「I テモ 6:12 信仰の戦いを立派に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。」